

【生のつまずき—子どもが己れの才能・想像力を活かせないのは何故なのか】（1984）

Kate Barrows

子どもは学習するのに己れの持てる才能 gifts そして想像力 imagination を精一杯に働かします。子どもの内なる世界の生き活きた参画なしには、学ぶことはせいぜいつまらぬものとなり、悪ければまったくのところ抑制がかかって機能しないままとなりましょう。ここで‘才能 gifts’といいますのは、ほとんど誰しもが持っている多様な資質とでもいうべきもの、そして知的能力とか自己表現力といったものを私は意味しております。稀有で、とりわけ目立つ才能について語ってはおりません。

子どもが自らに備わった才能を活かせるかどうか、それはごく初期の情緒的な生の営みに深い関わりがあります。つまりは、誕生後のごく初期の関係性、つまり母親、父親、同胞、そしてほかにも身近にいる重要な誰か、それらの人々との関係性においてその子がどのような抱えられ方 containment をして育ったのかに大きく拠るものといえましょう。赤子はそれぞれ固有の可能性、それにある種の傾向を備わって誕生します。それらは生来的にそして胎内の環境によって与えられたものであります。しかし、最初に他の誰かからもらう贈り物 gifts が何かといいますと、それは赤子の感情を受け取り、それらを身を持って吸収し、それらについてよく配慮し、それら感情をその子が受け入れられるように再び戻してやるといった母親の応答性なのであります。この論文の主要なる点とは、子どもの能力の発達、この母親からの最初の‘贈り物 gift’、すなわちその子への生き活きた関心 interests にその多くを拠っているということなのであります。しかしながら、子どもの生来的な個々の気質もまた、こうした最初にもらう‘贈り物’をはたして活かせるものかどうかを左右しているともいえましょう。

学習にはある程度の困難は付きものだというのはごく一般に広く知られております。だがそれらはまたひじょうに多くが性格上の困難でもあり、しかもその傾向が極めて著しいことが指摘されます。

さて、ここでご紹介するのは、或る一人の目立って学習困難を抱えた児童であります。この男の子との出会いがこうした問題を私が考える最初のきっかけとなったのであります。それは私が或る Adventure Playground でプレイリーダーとして携わっていた頃のことです。リロイは7歳で、学校で読み書きを覚えることがまるで出来ませんでした。彼の背景にはかなり暴力的な家庭環境があり、彼自身も乱暴 wild な子どもといえました。彼は多くの時間をプレイグラウンドで一人ブツブツ言いながら激しく駆けずり回っていました。立ちどまって誰かと接触したりなどは一切いたしません。こうした彼をなんとか文字が読めるように指導してくれないかと、私は頼まれたのであります。そこでやがて我々はいっしょに机の上の彼の読本を目の前に席に就いたわけですが、そのとき彼はなんだかとても怯えているふうでありました。私が<恐がってるの？>って聞くと、彼は<やあ、勿論そりゃそうだよ！もうメチャビビってる！だって野獣だよ。これってライオンだろ？それって虎だろ？この鋭いものは歯じゃないか？！>と答えたのです。彼はまるでことばの文字がページから飛び出して彼目掛けて噛み付いてくるように思ったふうでした。私がそれについてもっと話してちょうだいと促しますと、彼はごちゃごちゃとやや興奮気味に、両親

がひどい喧嘩をするもんだから家ではまるで生きた心地のしない事などを私に語っていったのであります。こうした30分程度のレッスンの時間が何回か続くうち、彼は不安感をぶちまけ、私がそれに真面目に耳を傾けたことにちょっと驚いたふうでしたが、徐々に文字を読むことを学び始めたのであります。まだまだ集中力の面ではかなり難しいものがありましたけれど、彼はまた、徐々に自分を語ることに興味を覚えるようになってきました。そしていくらか安心して受け入れられてるよう感じ始めたふうでもありました。しかしながら、その後も依然として彼は不安を抱えた、とても落ち着きのない子どものままであり、おそらくその成長は大いに波乱含みであろうことは容易に察せられたのであります。

このエピソードから、私にはごくごくぼんやりとしか把握されていない、多くのまだまだ理解しなくてはならない事柄があるんだなと感じるに到ったのです。そしてその後私は、児童のサイコセラピストとして、さらには成人の精神分析家としてのトレーニング並びに心理臨床に携わることになったわけですが、そこからこのリロイとの体験の核心部分にいくらか光がもたらされたように考えております。

ジグムント・フロイト(1910)は、認識愛的衝動 epistemophilic instinct(つまり物事のわけを把握する願望)を人としての基本的衝動の一つと考えました。彼は、それを子どもの両親の性交への好奇心並びに原光景なるものにつなげました。ここから、子どもの性的な好奇心に恐怖もしくは抑制が付き纏っているとすれば、それはすなわち学習能力の抑制に関わると見做されるわけであります。リロイは、両親の暴力的な関係性に気を奪われておりました。他のいかなるものを目にしても、両親間の暴力的な関係性をそこに見出す羽目に陥り、その恐れが本のページに綴られた文字も、それにプレイグラウンドで交流する人々ですら、もっと別の何か、おそらくはもっと穏やかで結構面白く有益なものとして意味づけられることを惜しくも妨げていたのです。彼が本に書かれた文字をどうにも読めなかったのは、すなわち彼にとって文字はどれもが暴力的に感受されて捉えられたからであり、それは両親間の暴力的でかつ興奮をそそられる関係性を連想させたからなのです。

メラニー・クライン(1923,1928)は、フロイトの概念を受け入れ、さらに拡張し、また彼女の児童分析の経験に応じて、徐々に強調点を変えてゆきました。彼女は、子どもの【両親というカップル parental couple】に向けられた心情にいつそう重要性を置くようになりました。まさにそれらの心情は、両親及び同胞、それから母親の体内にあると空想化された内容物 contents に投影されていったわけなのであります。子どもが心密かに抱くところの、母親の身体から排除されたとか原始的な光景から排斥されているといった心情は、その子の両親、それに同胞、それからあまねく外界全般に向けての子どものものの見方を大きく特徴づけるものと考えられます。こうして敵対的となった、もしくは損傷をきたした外界に直面することの恐ろしさが、その子の学びへの意欲・衝動に抑制を掛けることになるのです。リロイは、上記しましたように、乱暴な子どもでもありました。彼は、まるっきり彼自身の野蛮な感情と実際の両親間における暴力とがかなりなところ混在している状態にあったように窺われます。彼の暴力的な家族背景については、彼の家族をよく知っている他の同僚から報告され、確認されております。しかしながら、本のページ上に暗躍するところの野獣とは、彼の両親間の実際の野蛮さだけでなく、それはまた

彼らに投影されたリロイ自身の野蛮な感情の表れともいえるわけです。鋭い歯、野獣とは、母親の体内の空想された内容物—つまりは、その内に抱えもつところの父親、子どもたち、それに危険極まりない‘部分対象 part-objects’といったもの—として表象されていると見做していいでしょう。

もう一つ、私がリロイとの接触で強く印象に残ったことがあります。それは、私が彼の話の耳を傾け、感情の機微に触れて真摯に受け取ると、彼の気分も晴れ、至極落ち着きを取り戻したということでした。字を読めるようになったことと同様、彼は物事をありのままに了解するようになり、怯えなくなったのです。彼は、心に悩みがあれば、独り言してぶつぶつ吐き散らすのではなくて、誰かに話してもいいんだということ、そうするだけの値打ちがあると感じたのです。私は、彼の話の聴き入っている間にも、彼が陥っている苦境に憐れみと同時に恐怖で心をいっぱいにしたのを思い起こされます。

フロイトとクラインの後を引き継いで、さらにウィルフレッド・ピオン(1962)は、母親の‘抱える機能 containing function’について注意を促しております。彼は、赤子の母親へ向けての投影同一視 projective identification について語っておりますが、母親は投影されたものを受容しかつ変容させ、さらにそれらを今度はより堪えられるかたちで赤子に戻してやるのです。それを彼は母親の‘抱える機能’として語っているわけです。彼はこう語ります。<もしも赤子が死にそうに感じているなら、まさにその子の死にかけているといった恐怖を母親の中に惹き起こすことができるでしょう。バランスのとれた母親ならばそれを受容し、治療的に反応してあげることができましょう。すなわち、その恐怖で固まったパーソナリティの部分を赤子自身が今度はまずまず我慢できるありようで再び感じられるといった具合にであります。—こうして恐怖は赤子のパーソナリティによってどうにか対処が可能になるというわけであります。> リロイは自らの恐怖を受容し、そうした彼の恐怖で凝り固まったパーソナリティが私を介してより取り扱えるよう変容されたかたちで手渡されるのをうまく活用したように思われます。しかしながら、私が彼と関わったことが彼の越え難いハードルを越えるのにどんなに役に立ったとしても、彼、それに両親のどちらもがもつとつと援助と理解とを必要としているということは、私としては充分すぎるほどに感じておりました。

ピオン(1962)は、‘母親の抱える機能’というのが基本的に愛情深いものであることが肝要だということと指摘しております。<幼児は、乳房からミルク、それに他にも身体的な快適さを与えられます。さらには愛情、理解、慰めといったものも…。それもその子のイニシアチブが攻撃性の恐怖で(その攻撃性というのが彼自身の、もしくは他の誰かのいずれかのものであっても)、決して阻まれることがなければの話であります…。そしてもしもそうした情動がきわどいものならば、その子の滋養摂取する衝動は抑制されてしまうのでありましょう。> このことは、身体的な滋養に限らず、精神的なかつ情動的なそれについてもいえるのです。ですから学習困難という場合には、子どものイニシアチブ、それに滋養を摂取せんとする衝動が抑制されてしまっているということになりましょう。イニシアチブは学習体験において重要不可欠であります。もしも学習するという経験が子どものイニシアチブを涵養しえないとしたら、彼は閉塞するしかありません。

母親と関係する中で幼児が味わう愛情そして愉しさの質が問われますが、それは、適切なケアと注目を与えられていることから、その子の愛情の潜在能力が、憎悪の潜在能力よりも遥かに増しているという感覚を母親が持てるのが肝心要なのであります。幼児もしくは児童にとって、己れ自身のイニシアチブやら感情のたぐいが、どちらかといえば荷厄介で負担に感じられるものではなく、むしろ喜悅やら興味の源として感じられるといった、そうしたバランスが決定的に望ましく思われます。母親が生き活きた関心を自分に向けてくれていると感じられることで、子どもは己れを取り巻く外界への興味を促されてゆくのであります。

これは、《愛こそすべて》といった歌詞にあるようなレシピでは決してありません。或る意味、愛というのは事態をいっそうより難しくいたします。ピオンは、上記の引用のあと更にこう言っております。＜子どももしくは母親、或いはそのどちらもの愛情というのは、何らかの障害・つまづきを減少させるどころか増大させるといったことがあります。なぜならば或る側面において愛情は愛する対象への羨望と切り離せないからであり、さらにはまた別の側面からしてそこに排斥されている第三者の羨望及び嫉妬を惹き起こすからなのであります。愛情がどういう役割をなすものかについてはあまり注意を惹くこともないかもしれません。なぜなら羨望、競争心、それに憎悪がそれを曖昧なものにしてしまうせいでもあります。但し、愛情がないところに憎悪が存在することもないかも知れませんが・・・＞

攻撃性への恐怖は、抑制 inhibition の唯一の原因とは限りません。他にも興奮とか喜悅、もしくは生き活きた感覚に対する恐れがありましょう。母親が抑うつ的である場合、生き活きた感情は否定的な感情と同じぐらい危険視されかねません。子どもの学習能力とは、母親がどのようにその子の攻撃的な感情を、そして強烈な肯定的な感情をもいっしょに、受け入れることができ、又それらを意味あるものにしてあげられるかどうかといった能力に懸かっていると考えられます。

とても印象的な出来事としては、乳児は或る時期になりますと、次から次へと感じたり欲したりするところのものにいちいち圧倒されているというよりも、ジッと一途に何ごとかを考え始めたふうに見えることがあります。それは、その子が己れの感情を受け止められるようになり、そしてそれについて何やらあれこれ熟考することでこうした段階に至ったものと考えられます。我々がとても‘考えられない unthinkable’といった事柄について語る時、それはひどくおそろしい、もしくはとても堪えられないといったことを意味しております。‘考えられる thinkable’とは、思考する上で十分肯定的である、もしくは十分堪えられるといったふう感じられているはずで、学習困難を呈示する子どもたちは往々にして、‘考えられない’とか‘堪えられない’何ごとかを、もしくはそうしたものに伴って自らの内なる何ごとかを、無理矢理に取り込まねばならないと感じているものなのです。

母親にとって、子どもの感情を受容し、‘考えられない’ものを‘考えられる’何ごとかへと変換させるというのは決して容易なことではありません。それは多くの場合、彼女の現実の(もしくは内なる)両親、並びに同胞、さらには子どもの父親との関係性がいかなるものかに拠るともいえましょう。また子どもが

どれほどこちらの愛情を快くもらおうとする lovable 子であるかにも依りましょう。或る子どもたちの場合、他の子らと比較しましてもとても気難しく世話が焼けることがあるのは周知の事実であります。どのような邪魔立てもいかなるフラストレーションも、落とされるんじゃないかとか全然かまってもらえないといったサインとして見做しますし、そうした否定的な感情がとても強烈なわけですから。そうした場合ですと、子どもの感情に堪えるだけの辛抱と楽観の備わった、いかに前向きな母親にとっても、反応のいい、相手しがいのある子どもに接する場合よりもずっと難儀なことになります。また、母親と子どもがいい取り合わせ good match なのかどうか、お互い精一杯寄り添っているのかも問われることになりましょう。

子どものサイコセラピーにおいては、この最早期の母子関係性において、その理由が何であれ、うまくゆかなかった何らかのつまずきが、セラピストと共に再体験され、そこからより肯定的な解決が図られることが期待されます。セラピストの機能とは、母親のそれにも似て、子どもとの関係性を愉しみかつ尊重するといった能力、子どもの愛情と憎悪といった感情の潜在的なバランスについても楽観的であり続けられる、そういった能力如何に拠るものと考えられます。愉しむといってもサイコセラピーがまるっきり愉快なこと fun という意味ではありません。しかし愉快 fun といった要素はおそらく重要かも知れません。或る幼い女の子が私にこう言いました。〈こっつて自分の悩みとか愚痴とかを話すところだとばかり思ってたのに、でもなんだかメチャ愉快 fun だわ！〉しかしながら、愉しむことはまた関係しあうことの快感そして満足感といった基本的感覚にも関わりがあります。ですからそれは、子どもの中で肯定的な側面が認められてゆくことと並んで深刻な困難や不安感の解消につながることも有り得ましょう。

子どもにとって、肯定的な感情を認められながら、否定的な感情もまた大丈夫理解され、話し合われるといった感覚を心の内に持てることはとても重要と思われれます。そうであればこそ、子どもは十分安心して自分の能力そして想像力を働かすことになるでしょうし、自分の物事についての思考のありようがそれ自体価値あるものとして感じられるというものです。セラピスト側に子どもに関心を向け、その子についてもっとよく知ろう、そして学ぼうとする姿勢があれば、同時に子どもの方もまた、物事へ向けて関心を懐き、そこから学びへの意欲が促されることになるとも考えられます。

ティミーは8歳の折に、週4回のサイコセラピーに通い始めました。私は彼を4年間診たことになります。来所当初の彼の主訴というのは、稀に見る頭のいい子どもと誰もが一致して認めるのに、実際のところクラスで全科目ビリという成績だったことです。彼はとても赤ちゃんっぽく、母親に対し要求がましい態度になりがちでした。彼はどのような‘損傷’をも極度に恐れ、他の子どもらと一緒に外で遊ぶこともせず、その代わり家の周りをぶらぶらほつき歩いてはゴミ拾いをしてるといったふうでありました。

彼は赤ちゃんの頃母乳を与えられていましたが、それも外的な事情から突如として与えられなくなり、それから哺乳瓶のミルクに替えられます。すると彼は際限もなくガブガブ飲み、ひどく太ってしまいます。離乳食に切り替えられると、かなりの期間ひどく抵抗し、泣き叫び嫌がったとのこと。彼の他には兄弟が4人いました。年齢は殆ど離れておりません。家族は、ちょうど第一子の誕生直前にこの国に

移民してきました。つまり子どもらが幼い頃にはこの家族にとって外的な援助はごくわずかだったということになります。両親が英語をしゃべるようになるのには結構時間が掛かりました。ティモシーの母親は彼が産まれて後に深刻な抑うつ状態に陥りました。動揺を来たすことの多い不安定な日々がほぼ一年続き、なんとか克服したというわけです。父親は家族を養うことに絶望し、どちらかという逃避していたように見受けられます。家族について得た印象からいいますと、そこそこ力量もあり、いい資質にも恵まれているものの、それもうまく活かされておらず、あまり頼りにならないといった感じで、概して不安が蔓延しているといったものであります。しかしながら、こうした家族的状況も、両親の努力の甲斐あって、ティミーが1歳になる頃から徐々にいい兆しとなり、今やどうにかいい進展を見せ始めております。

ティミーが初回のセッションに訪れ、セラピールームに足を踏み入れたとき、真っ先に私の顔を熟視し、それから玩具並びに部屋の中を熱心に見入りました。<ここにはすべてがあるんだね。ぼくが必要とするすべて、何でもある！>と彼は感極まったふうに言います。額が広く、愛くるしい赤ちゃんぽい顔立ちで、そこにはちよっぴり嘲ったふうな笑み[a slightly mock-goofy smile]が混じっておりました。全体にはもっと幼い子どもにも似てて丸っこい印象でした。私は、<私が君にとって必要とするすべてを何もかもくれる人だって思いたいよね>と語りかけました。彼はテーブルがピカピカなのを喜びました。それが新品だと思ったのです。綺麗な色のゴミ箱をも喜びました。それから彼は弓矢を作り、粘土でネズミを作りました。彼はそのシッポを切って短くしてしまいます。<ほらね、こうしたらうんとよくなっただろ？！>と言います。そこで私は、シッポについて彼が抱く感情がまるっきり全然いいものなどではない私が思ったようだねと言います。彼はこのシッポを‘蛇’へと変えて、それを赤ちゃんの哺乳瓶に挿入しようとした。が、うまく行きません。しばらくして、私は、彼がひとりぼっちに放って置かれたと思うと、たぶん蛇みたいになって哺乳瓶やらおっぱいへ忍び込んでやろうと思うのね。でもそれで汚してダメになってしまうのではないかって恐れるんだわねと語ります。彼は家族人形を取り出し、すべてをいっしょにくっつけ合わせます。<ほら、皆全部がきっちりうまくつきあってる。誰一人として仲間はずれにされていないよ。それって凄いだろ？！>と言います。私は、これを彼の一人ぼっちにされることの恐れとつなげます。それから彼はすべての鉛筆の芯を削り始めます。そしてそれらをすぐに使いきってしまうことを心配します。私はこれを、彼がありたけの私のものを使いきり、私を空っぽにする事の恐れと関連付けました。

この初回のセッションで彼は私に自らの内なる‘窮状’をたくさん見せてくれたことになります。つまり彼はここで私を彼が必要とするすべてを保有している母親と見做していることになりますが、彼が私から何か貰おうとすれば、必ずやメチャメチャに取り散らかすやら空っぽにしたりして、何らかの損傷をもたらさないわけにはゆかず、それが為ついいには排斥される憂き目に遭う、だから結局は何も貰えないでしまうといった彼の心的事情がここからよく伝わってまいります。家族は全員がしっかりとくっつきあっていないてはならないみたいです、つまりそこには何ら互いに嫉妬心が起こらないようにでありましょう。彼が母親の体内へと侵入せんとする願望、それは彼の尻尾、ペニス、そして肛門にも関係があると感じられているようで、当然報復を彼は恐れているわけです。彼は私が彼に与える良きものに対する鋭い懸念を示しております。それは<ぼくの欲しいものが全部ある！>といったような、ものすごい理想化と同時

にです。彼の表現するところから察するに、どうやらありつた彼の感情のそれらは熱っぽさやら生彩にも溢れていて、それから強い興味 zest もまた取り込まれてるように窺われます。しかし対象に何らかの損傷をもたらすということなしには、それらを持続させることはできない模様であります。

第2回目のセッションで、彼は2匹目のネズミを作りました。餓死寸前ということです。私がそこで彼の飢えて死にそうな気分にくらか触れますと、彼はどうやら私の言葉を了解し、それが彼自身の感情にもフィットしたようでありました。ここで哺乳瓶の乳首は粘土で詰まり、ネズミさんの胃の具合が変になってしまい、下痢状態 leak となります。私はこの時点で些か頭がぼんやりして何も考えられなくなってしまう。彼は鉛筆をすべてどれも同じ寸法になるように削ってゆきました。私はそこで彼が十分なものをもらえず、仲間外れにされることの恐れを取り上げます。ここではたぶん彼は‘内なる母親 internal mother’との関係性について何ごとかを示しているようです。すなわち彼女はあまりにもたくさんの子どもたちを世話しなくてはならず、彼女自身の内側にもあまりにもたくさんの事柄が目一杯にあって、だからごちゃごちゃした思いやうんざりして気落ちするやらで、どうにもそれらを対処しきれず、だから待たされたままにさきに飢えて死にそうな子どもになぞ目もくれないといったふうに彼は感じているというわけです。子どもは不適切な‘心の器/コンテナ’を内在化したわけで、だから下痢状態のお腹やら下痢状態の心となり、つまりは物事を記憶したり、それらを消化吸収し、自らのものとして保有することができないというわけなのです。それで飢えて死にそうな気分をさらに募らせてしまうということになります。彼は、乳首ないしは母親を元通りきれいにしなくてはならない、おそらく彼女に何か食べさせてあげなくてはならないと思うのです。そしてたぶん彼は自分自身をネズミのように小さなものにしておきたいのです。なぜなら彼の感情があまりにも強烈に思えて、それを恐れたからなのです。

第3回目のセッションでは、彼は哺乳瓶の乳首の詰まりを除けようとしていました。ネズミは乳首が詰まっているせいで何ももらえないでいますし、それにお腹が下痢状態なので。彼が私をグジャグジャにしてしまうことを恐れていること、それでお腹が下痢状態で、彼の内なるものをしっかりと抱え込むことができなくなっていることを私は語ります。彼は、粘土でカップを作りました。それを‘ワールド・カップ World Cup’と命名して、さらに私が彼に与えてあったカップの中へそれを突っ込みます。彼はとても興奮し、<メチャ凄いだろ brilliant?!>と私に言うのです。それから彼はボールで遊びます。そのボールが十分によく弾んでいるかどうか見ております。私は、私がよく弾むボールのように生き生きとしているかどうかをとても気に掛けているんだねと彼に語ります。それはまるで授乳してくれるオッパイが不意になくなってしまったとき、彼はそれに背を向けて自前の器 container に頼ろうとしたみたいに思われました。つまりは自分で実際にカップを奪い取って我が物にしたというわけです、それが‘世界制覇’を意味しなくとも…。彼は、それが‘メチャ凄い’ことに思うのです。苦痛に満ちたいかなることも感じたり考えずに済むというわけです。それで彼の‘内なる心の器/コンテナ internal container’に与えてしまう損傷はこれでどうにか回避されたとも感じるのです。しかしながら、尚も彼は私が彼にとって大丈夫生き生きして十分彼に堪えられるかどうかと案じてもいるわけなのです。

そもそも彼が来所した当初、‘悪循環 vicious circle’が生じておりました。ティミーが母親の注意を引こうとすればするほど、彼女はうんざりしてくたびれ果て、ますます気持ちに余裕を失いがちになるといったふうで…。それで彼の気持ちとしては、全然良いものなどない、ただ‘メチャ凄惨’ものだけしかないということになったようであります。彼はそれとは知らずに、母親や他の誰の中にもある、‘より詳しい側面’を認め、もしくはそれを取り込むといったことや、もしくは彼自身の人格の中にも‘より詳しい側面’を育むことをも不可能にしてしまっていたということになります。上記の臨床素材から見て、彼のこうした心の状態はかなり早期から始まっていたことがよく分かります。

私は、彼のかかなりの程度圧倒され打ちひしがれた感情を抱えてやれるよう求められたのでありますが、ティミーの怯え身を竦ませているパーソナリティをどう解きほぐして意味あるものにしてゆくのかは実際とても骨の折れる作業であったと思われまふ。彼は時折、私の中にどうしようもない絶望感を惹起させることがありました。一方他の場合には、空っぽな思考停止状態となり、もうどこに向かうわけでもなく、何ごとにも対処できないといった具合になるのです。こうした思考停止状態は、堪えられないほどの不安感をなんとか懸命に排除せんと目論むことにあるといえまふ。彼の不安感の苛烈さは、母親側のそれに堪えられるかどうかという問題、それは私側についても同様であります。それもあるもの、おそらくのところ彼自身の資質としてそもそも強烈な感情があり、それとまたフラストレーションへの耐性もごくごく限られていたせいでもあるように見受けられます。

彼の私との関わり方から察するに、そこには彼の恐れる心情のみならず、そのための‘心の器/コンテナ container’が欠如していることも覗われます。すなわち私が彼にはもう堪えられず、彼を心に掛けたりしなくなり、もしくは彼の良い側面をもまるで見ようとしないといった恐れがうまく抱えられていないわけなのです。彼のセラピイはまことに浮き沈みがあり、決して平坦なものではありませんでした。が、その後徐々に、不安感は折々に頭を擡げることはあっても、それもどうにか堪えられるような趣きとなってゆきました。‘内なるコンテナ’の強靱さがいくらか増してきたものといえまふ。

ティミーは徐々にセッション中いくらか気持ちがシャンとしてきたかのように感じられ始めました。彼自体もそうですが…。時折とても考え深くなったりもしました。或る日のこと、彼は椅子に坐り、体を揺らしておりました。それで私は、彼は私の心の中でしっかりと抱えられていないと感じるせいなのかしらという思いを伝えたのです。私という母親の、その抱える腕から彼は放り投げられはしまいか、もしかしたら忘れられてしまっているんじゃないかと思ひ、それで頻りにからだを揺すっている赤ちゃんみたいに見えると言りました。すると、彼は遊戯室を見渡し、<今この部屋、とてもいい部屋になったねえ。明るいし、モノをきちんと片付けるところがあって、たくさんいろんなことも出来るよね。取り散らかしても大丈夫だね。それでありつたけ何もかもダメにするわけじゃないし…>と言います。彼はふと、ここはずっと昔単なる空っぽの屋根裏部屋で、窓もないし、扉もない、家具もない、床には穴が開いているだけだったんだろねと考えました。彼は、今この現実の私も或いは母親ですらも、彼が関わるや否や誰もが得てして過去の空っぽで薄暗い母親のイメージによって損なわれてしまうということを語っているようでありました。

さらにいろいろと他の素材からも、彼の分離不安がゆえに、現在の生き生きした気丈で逞しい母親がかつて彼が幼児であった頃の虚ろで薄ぼんやりした母親に変わってしまうように彼には感じられることが物語られております。

彼の強烈な感情が故に母親を傷つけてしまいそうに思えて、それで「対象の不在」にまつわる彼の感情に直面化するのが妨げられていたようであります。「不在」は、どんなに受容的であつ生き生きした人でもとことん回復不能なほどに虚ろで剣呑なものに変えてしまうみたいに感じられたのです。

彼は、学校での成績も上々で友だちもできるようになりました。しかし彼の利発さがさまざまに抑制から解かれるや、それは派手に理想化されるようになったのであります。例えば、彼の手書きは、最初の頃にはメチャメチャで読めたものではなかったのですけれども、それがちよつとの間にもものすごい大した達筆だということになり、音楽の方も、俄然ものすごいポップ・スター並になったつもりになりますし、数学にしても、もしも問題が解けたりしますと、自分はまるで天才かと思うのでした。実際のところ彼の成績は、一度躁的なスパイラルに嵌って非想像的になりますと、いつも実に冴えないものとなりました。それで幻滅に陥り、再び<もうダメだあ>という気分になるのでした。私は、彼が物事を成就したり、自分の中に何かしら価値あるものがあると気づく折にパニックを起こすのは、何やら「オッパイ」の喪失について彼が抱く感情に繋がりがああるかも知れないとふと思われたのです。それは彼の第3回目のセッションにおける『ワールド・カップ』の臨床素材にも垣間見られる事柄であります、おそらく彼は自らの内なるいのちの源を喪失することから身を守ろうとしていたのでしょう。

さて、彼はセッションの中で《心の中のテレビ番組》を眺めるといったことに耽溺し、それがかなりの期間続いたことがあります。この事態において、私は極度にフラストレーションを覚え、時には排除されているという気になったり、どうにもならないと絶望したり、怒りを覚えたりもしたわけです。彼は、抑うつ的で心がうわの空だった母親に自分が排斥されていると感じたところものを今や丸ごと私に投げ込んでるように思われました。同時に、内側に目を遣ることで、何とか自分自身が排斥されていると感じないように抵抗していたともいえます。しばらく経って、幾らか不安感が解(ほぐ)れるにつれ、彼はこの不毛なテレビ観賞には飽きてしまったようであります。私は、彼が自らの想像力を活かすことを恐れているということを語り、彼の感じるものやら想像するところのあれやこれやに私が我慢できないと彼が思っているということを指摘します。そうしますと彼は徐々にそうした事柄をもっと言葉にし始め、彼自らもようやく自覚するに至ったのです。

この頃に、「魔女 witch」が登場してまいります。ティミーは、床にうずくまり、毛布で身を覆います。そして、おぞまじげな、昔々それも何百年も前の古びた魔女だよと脅かします。彼女には眼がないとのことです。眼の代わりに、ただ燃えるような真っ赤な穴が開いているだけなのです。彼女は‘頭脳明晰 cleverness’と名づけられる病いに罹っているとのことです。それは人の自制心を失わせ、気を狂わせてしまうといった性質のものなんだとか。そこで私は語ります。<その‘魔女’というのは、実は私のこと

だわね。私が‘頭脳明晰さ’を使って、君の自制心を失わせるんだわね。それで君の心がどう感じているか見ようとせず、また君のことをまるで理解しようとしないうとことだわね>と…。すると彼は、<‘頭脳明晰’というのはね、本当のところ‘ナンセンス(無意味)’ということだよ>と言い返します。彼は毛布を頭から除けて、魔女などどこにもいなかったかのようなふりをします。<誰かいたの？ぼく誰も見なかったけどさ…！> 彼はそれについて語ることを渋りました。もし語ろうとすればセッションの時間がなくなってしまうというわけなのです。‘魔女’は、彼に家族の誰彼を想起させました。また実際のところでは私に対して抱く恐怖心やらセラピイの悪用 misuse といった可能性にも関連づけられるであります。かくして‘魔女’のエピソードは、彼の知能 intelligence を使う恐怖、もしくは私の知能が使われる恐怖といったことを理解する上で多くの手掛かりを与えてくれたように思われます。頭脳明晰さとは、まさに気が狂れんばかりに現実を奪取し、それについて断固否認してかかることであります。そこには彼自身の心情なる現実も含まれておりましょう。ティミーが己れの知能やら想像力を自由に活かすことができないのは、私が彼の感情を受容し、そして意味あるものにして彼に返してくれるものか不安に駆られているせいでもあり、どちらかといえば私が頭脳明晰さを利用して彼に備わったそれらのものを横取りせんとしているのではなからうかと恐れているからであります。じっくりと時間を掛けて物事を理解すること、不安感にも堪えながら、だから待つことも大事だとしたら、彼にとってはたちまちフラストレーションが昂ってしまうのです。それで、私はもはや理解をしてくれる誰かさんではなく、‘頭脳明晰な魔女’に変身させられてしまいかねないといったわけなのです。

ティミーと接触を保ち続けるのは折々にとても難しくなりました。それは彼がややもすると疑心暗鬼となり、ナンセンスなことを言われて、自分がバカにされることを恐れていたせいでもあります。私もまた、彼には素早い、ないしはマジックな解釈を与えなくてはというプレッシャーを覚えたのであります。苛烈な不安感を目の前にして、それらの感情が徐々に明確化されてゆくのを待つというよりも、何とか説明的にうまく言い抜けるためでありました。どうか早く反応を得たいといった彼の焦りに煽られ、そうしたプレッシャーを覚えることで、じっくり思いをめぐらす(reverie)ことにも考えを練りあげてゆく(transformation)ことにも十分な時間を割く気持ちの余裕を失ってしまうのでした。ティミーの「待てない」という性質上、それに損傷やら餓死といった差し迫った不安感のために、私は事態をなんとか間に合わせのあつても、すぐさまそして万能感的に片付けてしまわなければならないといったプレッシャーにあつたわけです。それで、今回顧しますなら、いずれはそのうち適宜に理解できるようになるとの樂觀を維持しながら、尚も不安感から目を逸らさないというのが些か困難であつたように思われます。

さて、さらにここでティミーの或るセッションの一部を記述したものをご紹介いたしましょう。彼の物事について知ろうとするイニシアチブそして関心が、彼の否定的な感情に私が堪えられるかどうか、彼の進歩をもちんと認めてくれるかどうか彼が抱く不安感にどんなふうに繋がっているかを例証しております。

或るセッションの終盤のことですが、彼は物の重さを量る滑車装置を作りました。そのセッション中彼は愛情と憎悪との間で葛藤していると思われましたが、それは父親、そして同胞との関係を巡っ

ての彼の‘占有欲’に関係したことであったわけです。そして彼はその滑車装置の2つのうちのどちらが下がるかを見ておりました。私はそれを眺めながら、愛する思いと怒りの感情のどちらがどちらなのか彼はそうしたバランスを測っているのではないかと考えておりました。彼はそれからもう片付けなきゃと思います。セッションの時間が終わりだと考えたわけです。私は、＜自分の怒りの感情で私がめっちゃめっちゃになったり、それで私がどこかへ逃げてしまうと感じたのかしらね＞と示唆しました。

すると彼は窓際に寄って、カーテン・レールを見上げました。それは以前彼が幾つか紐を繋げて、遠くからでもカーテンの開け閉めができるように細工してあったのです。そのセッションの折の最後に私が紐を取り外したのですから、当然ながら紐はもうそこにはないわけですが、それを認めると彼はがっかりしました。私はここで彼の感情を取り上げ、＜もしも私を遠隔操作できなかつたり、もしくはさっき探していた紐みたいに、ここにずうっと君を置いておくことができないとしたら、自分が忘れられていたり排除されてしまったと感じるのだわね＞と語ります。そして、彼にどんなに良き感情があらうと、それが私にどのような印象をも与えることはあり得ないと彼には思えてしまうことも・・。

彼は窓の外を眺めました。そしてそこに眺められた庭の隅にここ最近建てられたばかりの物置があるのを認めます。彼は＜ほら、物置があるよ。あれ、いいねえ。とてもしっかりと出来ているよ＞と言います。ティミーはテーブルの脇に立っておりました。＜ぼく、もう今はしないけど、かつてしたことがあったよね。テーブルをひっくり返すとかね。テーブルって、しっかりしててびくともしない箇所があるんだよね、簡単にひっくり返る場合もあるけど・・。＞今や彼はテーブルをテストし始めました。すなわち、テーブルの端をどう持ち上げればバランスが崩れてひっくり返るかといった簡単なことではなくて、どうやらテーブルのある箇所はどう押してもびくともしないのに、他の箇所はどうかすると危ういといった感じになるのを見極めているようでありました。それが私には、彼が私をママと見做しながら、その私のどこら辺が頑丈でどこら辺が脆いかを調べているみたいに思われたのです。かつて彼は単純に私をひっくり返してやりたいと思ったものでしたが、今や私から得た力を活用し、彼自身の中に何ごとかを育みたいと思うようになっております。しかし、今尚も彼は私の脆弱なところ、つまり彼が私をママみたいに見做すとしてですが、すぐに気が動転して不安定になるのではないかと恐れているのであり、私が彼から去るとしたら、私が彼の感情に堪えられるほどに強靱ではないと思うわけです。彼はこうした私の話し掛けに耳を傾けておりました。そして＜フムフム・・・＞と頷きました。彼は私が用意してあった傍らのティッシュ箱からティッシュを使って鼻を拭きました。その後でそれをゴミ箱に捨てます。普段彼はティッシュもゴミ箱もどちらも使うことはありませんでしたから、珍しいことなりました。

このセッションの記録を書き綴りながら、私は、彼の進歩が認められてもいないし、喜んでもらっていないと彼が思っていることを指摘してもよかったのという思いを抱きました。彼は＜ぼく、もう以前のようなことしないもんね＞と言ったわけです。彼はその代わりにもっと考えられるようになればいいと思っ

うなのです。そこで初めて彼はしっかりと建てられた物置小屋を視野の中に入れることが出来たのだという事はありそうに思えます。彼の嫉妬の感情が私を破壊したり、もしくはそれで私のいのちが絶やされてしまうこともないと気づくことは彼にとってとても重要なのでありました。そうであればこそ、彼は安心してテーブルについてあれこれとその性質を吟味することもできたわけですし、それはセラピストについても同様であったと思われる。

完璧で弱点が何一つない母親であることへの要求、それは始終傍らにいてくれる母親ということでありましょうが、それはまた同じ意味で‘魔術師 magician’みたいな父親への要求は、彼の臨床素材の中にしばしば現れることがありました。それが今や、さほど完璧ともいえない私にも我慢し、私の弱点に付け込んで勝手放題に大暴れするのではなく、むしろここでもたらされる資力 strengths を活用するようにならなくてはといった願望に取って代わられてゆくように思われました。

彼の己れの良き感情を認めんとする課題が浮上し、誰かの何かの役に立つことをしたいとか助けになりたいといった感情が徐々に顕著になってまいります。或る機会に彼がこんなことを言いました。自分に親しげに何かしてくれないかと頼んでくれて、それで彼がそれに従い協力を惜しまずできる限りのことをした場合、それを感謝してくれるといった誰かがいる。その一方で彼に従うようにと命令し、でも彼がしたことには決して満足せず、それでいて完璧を求める誰かがいる。両者はまったく違うと・・・。

このことは改めて「不在対象 absent object」との良き関係性を築くことの困難に繋がってまいります。彼は、私の不在そのものを、彼の良き感情が十分なものとはいえない、ないしは全然認めてもらえないといった兆候と見なす傾向がありました。彼にとって私の不在が他の誰かとのかわり合いを意味していると想像することはとても辛く、心が傷つく痛みなのでありました。何故ならそれは彼が拒絶されたことを意味するからです。

しかしながら、彼は徐々に日々の暮らしで起こる現実的なできごと、家庭やら学校での日常的な現実について話せるようになってまいりました。彼はまた、物事を真面目にしっかり把握することとか、物事に取りくむ上で真摯な姿勢が肝要だということも解ってきたのです。バイオリニストが奏でる音を耳にして、彼はこんなふうなことを口にしました。<いい音色だねえ！ずいぶんとしっかり練習したんだらうねえ。> 或る良きことに心を傾け鍛錬することを認めたということは、彼自らの良き側面を延ばし、いろんなことを身に付けるためにもしっかり勉強してゆこうといった心情に関連づけられるでしょう。そして、私がマジック的に即座に解決策を彼に与えることなど出来ることではないということを理解し、むしろ彼の感情を理解しようとするならば私にも十分な時間が与えられることが必要であり、だから理解するには時間を掛けることを惜しまないことが大事なんだと彼にも感じられるに至ったものと思われる。

ティミーについて最初に彼の両親から話を伺い、又後に彼の学級担任からも話を伺ったとき、私は彼の知力とその才能について周囲の人たちが抱く理想化 idealization にはまったくのところ衝撃を受け

ました。まるでセラピイから一つの‘奇跡’が起きたみたいと思われているように感じたわけです。まさに‘不死鳥’が灰の中から甦るといったイメージです。このイメージについてはティミー自身セッションの中で一度言及したことがありましたけれども…。彼の才能は理想化されていたように思われます。それもどうもお誂え向きといったふうで、実際のところ物事に対する取り組みもまだまだで、感情についても普段往々にして四苦八苦することがありますから、そんな彼を妙に持ち上げてしまっているように思われました。恰も、もしも誰かが、たぶん彼のセラピストが、正しいボタンを押しさえすれば、彼はたちまち‘メチャすごい brilliant’になるといった感じなのです。つまりは何ら努力も要らない、そして如何なる内なる不安感をも顧慮せずともいいといった感じであります。理想化は、ティミーが依然として彼の能力を十分使えていないという事実を覆い隠しているように見受けられます。またそれは、損傷をきたしている子どもの、そして大人の内界(そのいずれもが相互に関係しているわけですが)、そうした心的状態から目を背けず直面化することをまったく不要と見做していることとなります。「学習困難の子ども」を取り巻く周囲の人々の期待感、しばしば極端に高かったり、もしくはひどく低かったりします。それは恰も子どもの現実の能力もしくは心的状態などというものは、理想化もしくは幻滅のいずれかにおいてまるっきり視野の外に見失われてしまっているかのようなのであります。

最後に一つ、成人の臨床例をご紹介します。まずは分析を開始するばかりの或る女性患者が見た夢についてであります。彼女は初回面談のために私を訪れてくる前の晩にこの夢を見たのです。その夢の中で彼女は誰かに会いに行こうとしていたということでもあります。それで彼女の一番のお気に入りの貴重で大層美しい品々をありったけスーツケースの中に詰め込んでいたのです。それらを見せたかったのです。布切れがいっぱいあったのですが、それらはとても興味をそそる彩りの鮮やかなもので、でもそれらを使って何を作ったものやら、もしくはそれらをどう継ぎ接(は)ぎしたらいいものかまるで見当が付かなかったのです。それで誰かからの援助の手を必要としていたというわけなのです。しかしながら彼女はそれら貴重な品々をすべて片付けてしまうよう言われてしまいます。何ごとかについて指導されるべくその場に赴いたということらしいのです。それから彼女は、赤ん坊が台座の上に乗っけられているのを目にしました。誰もその子の身の危険を察していないようでした。人々は傍らでその子についてただ話しているだけで、手出しもせず抱きあげようともしておりません。そこで彼女は目が覚めました。

この夢についての彼女の連想は、実際のところ彼女は、決して使いもしない美しいモノをいっぱい持っているということ、そして今感ずるのは夢について全部解ったとはいえないので些か不安を覚えるといったことでした。そこで私は彼女に語りました。一つは、彼女自身についてたくさんの理解していないことがあるという恐れです。それというのも、私が彼女の創造的な側面を見ようとしない、ただ単純に彼女に指示を与えるだけであり、さらには私がまた彼女の感情について語りをするものの、彼女がまるで落っこたされるのを怖がっている赤子のように感じていることなぞ取り上げない、まるで見過ごしてしまうのではないかと彼女が考えたからだということでもあります。こうした解釈は彼女にいくらか安堵を与えたようでもあります。そこで彼女はさらにこれに関連して最近起きた事柄やら幼少時の出来事などを語ってゆきました。夢の2つの部分はおそらく関連性がありましょう。彼女は自ら所有の貴重な内的なあれやこ

れら(internal objects)をすべて放り投げて棄ててしまうよう、その代わりに教を請う learn a lesson よう強要されると思ったということが夢の中に示されております。それはすなわち彼女の中の赤ん坊の部分が‘理想化’されているが故にその身が危険に晒されているということがまったく見過ごされてしまっており、従ってそこには母性的なコンテナーcontainer が欠如していることに関連づけられましょう。

彼女の才能を活かすことの困難性、彼女の彩り豊かな‘内なる対象’、そして‘理想化’、さらには彼女の人格の中の幼児的部分 infantile part が抱えられていないといったコンテナーの欠如 lack of containment とは、それぞれ相互に関連性があるものと考えられます。彼女は手元にいくら素材を与えられていたとしても、それらをうまく活用できないわけです。何故ならば、そうするには、まず幼児的感情を受容することが前提なのです。目下のところそれは無視されるかもしくは理想化されているというわけであり、彼女の分析が進展するにつれ、彼女の創造性 creativity に活力が戻ってきました。それはそれまで認められずにいたか、もしくは堪えられないものとしてあった幼児期の不安感を彼女が受容していったことに関係しているといえましょう。

総括しますと、子どもが新しい物事を受容し、それらについて考えを深め、自らのものとする能力とは、その生に備わった才能そして想像力を活かす能力に関連づけられるということになります。それは子どもの初期の母親との関係性に基づいております。特に子どもの肯定的そして否定的な感情に対して母親が開かれたものとしてあったかどうか、それに実際のところどう対処したかという能力にも依りましょう。さらに肝要な事実は、子どもがその潜在力を発揮し大いに顕在化させてゆく上での困難な時期を通して、母親がある種の‘樂觀 sense of optimism’を持ち続けられるかどうかです。その子が身の回りのモノに興味を覚えるかどうか、それは母親が子どもに生き生きとした反応を示してあげているかどうか、それに懸かっているのです。子どもの生来的資質といったものも、母親との関係性に、またそれをその子がどう活用するかに大いに寄与いたしましょう。大人の創造性がこうした初期の関係性がゆえに躓いているとしても、幼児的な感情を受容されかつ解消されるうちに、それが大きく甦ることがあります。子どものサイコセラピーでは、セッティング(場面設定)がゆえに自ずから喚起された熾烈な感情が、セラピストに、母親に対すると同様な或る基本的態度を要請することになりましょう。勿論セラピスト本来の仕事はひどく違ってはいますけれども…。子どもがセラピーから学び、恩恵を得ることができ、才能そして想像的な生活が大いに活気づくとしたら、そうした子どもの能力とは、まずは母親から最初にもらった贈り物 gift、それからその子自身に備わった資質に依るものと考えていいでしょう。同様に子どもはセラピーにおいて、その子の感情 feelings についてまずは受容され、思いめぐらされ reverie、そして共に語り合われるといった贈り物 gift を貰うわけで、そこから大いに恩恵を得ることになりましょう。さらに彼の情緒面及び知能面での成長は、まずは不安感が理解され解消される結果から招かれるものと考えられますが、子どもが己れの潜在的可能性を発揮する能力に対してセラピストが基本的に樂觀を抱えていること、それが子どもにも直感的に把握されていることに拠るでしょう。そして外界に対しての子どもの関心そして熱意は、セラピストが生き生きとした関心を持ち続け、子ども自身についてよりいっそう深く知りたいと願うことによって大いに励まされ促されるものと考えられるのです。

※ 《参考文献目録》:

- ・Bion, W.R. (1962). A Theory of Thinking . IJPA Vol.43,parts 4-5.
- ・Bion, W.R. (1962). Learning from Experience . In Seven Servants. New York.
Jason Aronson.
- ・Freud,S. (1910). Leonardo da Vinci and a Memory of his Childhood.
Standard Edition,Vol.XI.London,Hogarth.
- ・Klein,M. (1923). The Role of the School in the Libidinal Development of the Child.
The Writings of Melanie Klein, Vol.1,London,Hogarth.
- ・Klein,M. (1958). On the Development of Mental Functioning.
The Writings of Melanie Klein, Vol.Ⅲ,London,Hogarth.
- ・O' Shaughnessy,E.. (1964). The Absent Object. Journal of Child Psychotherapy, Vol.1,No.2.

※ 《原典》:

《A Child Difficulty in Using his Gifts and his Imagination》

by Kate Barrows

【Journal of Child Psychotherapy】 1984, Vol. 10

《訳者あとがき》 ～子どもの心を蝕むシニシズムをめぐって～

山上 千鶴子

ここに【参考文献アラカルト】の第二弾として、前回に引き続きKate Paul (Barrows)の論文をご紹介します。‘学習困難’をきたしている子どもとの出会いの中で、生を育てゆくことが何故に阻まれてゆくのかと、そこにKateの憂いと慈愛の込められたまなざしが根源的な問いを投げかけております。そして究極に彼女の意識に掬い取られたものとは、子どもの心の闇に巣喰う侮蔑と嘲笑にみちた‘シニシズム’ではなかったかと私は考えます。殊に『症例ティミー』のセラピイは、「シニシズムとの闘い」が主眼であったと思われます。相手が子どもだと決して侮れない。彼女はそのおぞましさに折々に身震いする心持ちで猶もティミーの傍らでその‘闘い’に踏みとどまったといえましょう。

そもそもティミーの世界は共同化されていない。彼は疎外という状況のなかで他者から分断され孤立している子どもであります。赤子のティミーにとって抑うつ的な母親とは、己れの口から外れたままの「オッパイ」でしかありません。それもクライン流に言えば、「乳首のないオッパイ」であります。「シニシズム」とは、そうした不条理なものへのルサンチマン(怨恨感情)を根底に潜ませたものであります。そこに繋がりを回復する機能を担うはずの「乳首・父親ペニス」はもはや跡形もない。焦らされまま放置され、欲望が宙吊りになったまま、彼は飢餓感と放逐の思いに絡めとられる。そして己れの泣き叫びだけが虚しく己自身を満たしてゆく。迷子にされた感覚。茫洋としたとりとめなさ。羅針盤を喪った航海にも

似て、時のうつろいにさ迷う。大きく口を開け、必死に出会いを希求するも、やがてその徒労にうちひしがれ、泣き寝入りの中に没し去る。いつか抱かれる母の懐を夢みることも途絶してゆく。その胸の温もりはいつしか忘却される。その時、シニシズムが忍び寄り、冷ややかな黒々とした影にすっぽりと身が捕えられるのです。そしてティミーがセッションの中で自ら‘証言’したように‘魔女 witch’そのものの虜(とりこ)となるのであります。身の毛が逆立つような、まさに怪奇(ホラー)小説紛いの素材ですが、案外彼はへっちゃらといった無感覚を装っております。このシニシズムの権化ともいべき魔女には‘目’がない、火の噴いた‘穴’だけというのが実に瞠目に値しましょう。滋養を与えてくれるはずの「母親オッパイ」は「乳首」が抜け落ち、‘穴’つまりは‘尻の穴’＝‘肛門’といった心的意味づけに彩られ、役立たずで無価値なものに化し、揶揄されるばかりであります。Kateは初回の面談に訪れた彼の顔面にそれを逸早く察したようであります。ちよっぴり嘲ったふうな笑み(a slightly mock-goofy smile)というのがそれです。彼とのセラピーにおいて、そうしたシニシズムの蔓延する彼という存在に関わりながら、実に筆舌に尽くし難いむずかしさに彼女は耐えねばならなかったように覗われます。

私たちセラピストという種族は、クライアントから向けられる侮蔑やら嘲笑には慣れていないという気がしてなりません。というよりはどうやら慣れ過ぎてるのかも知れません。脱価値化 devaluation とか羨望 envy といった概念でうまく理論武装しているせいか、本気に取ったりはいたしません。ましてや揶揄されてるなどというのは論外というわけです。傷つくことはない、まったく心が頑健に出来てる(tough-minded)といったふうであります。しかしまさにティミーはそうしたセラピストの盲点に直撃してくるわけです。どうやらまるっきり彼は彼女を‘おちよっている’としかいいようのない事態がセッションの中で頻繁に起きていたように覗われます。例えば、魔女が雇っている病いというのが‘頭脳明晰さ cleverness’ということが挙げられます。それも要するに‘ナンセンス(無意味)’なんだといった彼の叙述が実にみごとです。つまりは、彼は彼女を揶揄しているのです。<おまえさんの言っている‘解釈’というやつは、まるで‘尻’みたいなもんだ！こちとらにはさっぱり解らないんだよねえ>というわけです。この「思考の倒錯[マイナスK;ピオン]」こそがシニシズムの中枢をなす悪疾といえましょう。その内的現実のリアリティのおぞましさに圧倒されながら、Kateは必死になって筋立てを試みます。彼の一举一動に目を据えて、そこで起こる一つ一つの事象に何らかの意味があるのだと、‘わけのわからぬこと’などあってはならない、断固‘わけのわかるもの’にしなくてはと果敢に挑むわけです。それは分析家の性(さが)ともいえましょう。それでつい躍起になってしまい、知らず彼女の知性と教養が躍り出て、つまりティミーのいうところの‘頭脳明晰さ’というやつですが、相手にはこちらの言っていることが了解されてないかも知れないということをつい失念してしまう。躍起になればなるほど一人空回りしてゆく自分を彼女は、意気沮喪しながらも、しっかりと内なる目に留めております。そこで命綱となるのは、<否、そんなことはない。確かに彼は了解している>という己れの信念だけあります。そして次なるセラピーの展開に‘証拠(evidence)’を見出すことに専念してゆくでしょう。しかしながら時には、<これって、滑稽かも知れない・・・>と、彼女はふと我に返って嘆息したに違いありません。そしてもっと悪いことに、もしかしたらこれらすべてがセラピーの‘悪用 misuse’を許していることになりはしないかという疑念も頭を擡げたようであります。それをどうにか打ち消して、<本当にそうだわ。私はまだ彼のことをほんとうには何

も解っていない・・・>と呟いたであります。そして無力感から辛うじて立ち直ることを幾度も繰り返したであります。実にその無力感こそ、侮蔑と嘲笑とともにティミーの心を蝕んでいるルサンチマンに起因していることは明らかであります。

確かにどれほど彼の過去を探ろうと家族からの証言を掻き集めたとしても徒労でしょう。ティミーが誕生以来、赤子として己れの虐げられた心情にどれほど耐えねばならなかったかを真に知ることは誰にもできるとはもはやいえません。唯一、セラピイの経過の中で彼の心が自己告発的に自証してゆくところの‘転移現象’しか真実を掴む拠りどころはありません。セラピストとしてのスタンスはそこにしかないとも言えます。が同時に、真実過去に起きた事柄に限らない、現在進行形において、彼の家族との絆が実際いかなるものか、そこに‘亀裂’がないかどうか気が掛かります。例えばここで一つ、彼が‘魔女’との関連で家族の誰彼を想起したと書かれてある箇所が私には引っ掛かります。大して年の離れていない兄姉がぞろぞろ4人もいるという家庭環境、その彼らと関係において末子であるティミーがどう生き残れたのか。そこには何か暴力的かつ倒錯的な臭いを嗅ぐ思いがいたします。決して彼の過去は終わってはいないので、何も片付いてはいない。心は日々踏みにじられ虐げられている。そうした苛酷な現実が猶も続いているとしたら、ティミーという生のリアリティを全体的に把握するには今ひとつ時間が要するというのが彼女の率直なところでありましょう。いのちを蝕むところの「シニシズム」からの解放とは生の甦りであります。他者との共同化された世界にやがて彼が自らの居場所を見出すことであります。それがそもそも「学習」の根本課題でありますわけで。「学習困難児童」は読み書きができることを目的とするだけではありません。それぞれがそれぞれの生に喜悦を取り戻すこと、生の権利を回復させることが本来の眼目です。そうした命題を見据えながら、「今・ここ」でティミーの感ずるところそのままに寄り添い、彼と共にその生を奪還してゆかんと苦闘するKate Barrowsの愚直さが彼女というセラピストの真骨頂といって間違いないでしょう。そこに‘生きとし生けるもの’と結ばれた、彼女の‘願掛け’とも‘祈り’ともいえる何かがある。私はとても頼もしく思うのです。

もう一つ、彼女はこの論文において、課題を投げかけているように思われます。それは「Professional Detachment」ということです。敢えてこれを訳せば、‘職業上における心的分離’とでもいえましょう。対象への過剰な感情移入やら感溺を避け、距離化を図らんとする意図があります。これは心理臨床に携わる者にとって会得されねばならない専門的な技能であります。トレーニングの過程で培われてゆきます。discipline(専門性の規律)の一つであります。日本の心理臨床家たちにはおそらくその言葉も、その内容自体も馴染みがないかも知れません。むしろ共感 empathy という言葉が金科玉条のように広く浸透しているのとは対照的であります。どちらも日々臨床の中でクライアントと出会うセラピストの姿勢について重要な点が語られております。そしてどちらか一つではなく、そのどちらもバランスを保つことが臨床上肝要であると私は考えております。ただあちら英国の事情から申しますと、日本とはどうやらまったくの逆の趣きなのであります。感情移入やら共感がむしろ苦手といったことがあるように見受けられます。Kate Barrowsのこの論文の最後に成人の女性患者の症例が載っておりますが、この方が初回面接の訪れた際に前の晩に見たという夢が実に印象的です。彼女には専門的

援助を自分が必要としているという認識は間違いなくあるものの、同時に怯え・気後れが覗われます。夢の最後に赤子が危機的な状況に晒されていて、だが周囲の誰もが一切手出ししようとはしないと
いった光景は、実に英国で一般に【精神分析】がどう見られているかを物語っているように思われます。
つまりそれはセラピストに‘手’が無いということでしょう。理解はされるかも知れない、でもそこではほん
とに必要とされる心を寄り添ってもらえてるといった感触が欠如してるということでしょう。彼らは日頃互
いに‘大人扱い’を信条としております。己れ自身についても他者に対しても…。むしろ自分が‘子
ども扱い’されるなど心証を害するところの侮蔑と捉えがちです。しかしながら、もしも「誰かの子どもにな
ることの嬉しさ」がないとしたら、セラピイはつまらないではないかと私は思うのです。畢竟セラピイの中
で語らねばならない・聞かれねばならないことの多くは己れ自身の‘小児的部分 (infantile part)’である
わけで…。しかしこれが即セラピイを受ける上でつまずきとなるのはとても解る気がいたします。

私は、異国での暮らしの中で‘半人前’であることの自覚が長らくありましたから、イギリスの子どもた
ちに我が身を重ねることがありました。「子どもである」ということは弱者・劣者に位置づけられ、得てし
て侮蔑・嘲笑に晒されるという厳しい文化なのだと思いました。そこに子どもが味わうであろう屈辱と痛
み、その虐げられた生の記憶、そこに最も深く隠れたルサンチマンの根源が潜んでいると考えられます。
性別・階級を問わず…。そこから気概もあり度量もある‘小さなゼントルマン&レディ’が育つてゆくと
考えられましたが、無能感・矮小感で自滅してゆく子どもらは数知れないでしょうし、うまくいっても己
れ自身とも他者とも折り合いの悪い、こわばったもしくは歪んだ性格が育つことになりましょ。そうした
危機意識こそが、ようやくにして戦後Dr. J. Bowlbyに託された【タヴィストック】での児童セラピスト
養成コースの端緒であったと思われま。

ハイデッカーが近代以降人々の心のなかに「思いの喪失」が顕著になっていることを指摘したんだとか。
産業革命の煽りを経て、人々は効率的・有用的な道具的存在と化してゆき、そこにはじつりと誰か
に思いをめぐらすとか心を寄せるといったことが人々の心の裡で日増しに疎くなってきたということでしょう。
そこに、ピオンの【reverie】という治療概念が母子関係性に持ち込まれ、人々を瞠目させた所以があ
るのです。その影響の跡が色濃くこのKate Barrowsの論文にも覗われます。昨今どうやら日本の
母子関係も概して‘水臭い’ものになってきているとはよく耳にすることです。安閑としてはられ
ません。「思いの喪失」は真に我々の脚下にあり、それで今や我々も彼らに倣い、ピオンを追っかける
事態になっているのでしょう。さて、「reverie (もの思う母親)」とは何かを敢えて申しますと、子どもの心
を読み解くことでありますが、さらには痛みに共感し、その傷つきを宥め、子どもを為す術なしの落ち込
みから引き上げる。手立てなしから手立てありへ、出口なしから出口ありへと導く。そのために思いを凝
らし、それが我・汝の呼び掛けになることであります。子どもが無力感から立ち直り、この現実世界に
根を持つこと、そして未来へと繋げられてゆくこと、そのために傍らに誰かの‘手’が添えられてあるとの
信頼が回復されることが肝腎であります。未来を創造する契機を孕む生の営みとしてのセラピイに心
を尽したいと思うのです。

(2014/03/25 記)